

カラマツの枝打ち時期と巻き込み

問 カラマツの枝打ちを行ないたいと思っていますが植栽後どれくらいの時点で行なうのが適切でしょうか。
(北見 T生)

答 枝打ちはその林分から最終的にどういう材を生産するかという目標によって、実施する時期は異なってきますが、ここでは枝打ち後の巻き込みという観点から回答します。

図は枝打ちした材の縦断面をしめしたものです。太線が枝打ちを実施した時点の年輪で、点線は枝がないと仮定した時の年輪の走向です。この点線から枝打ち面までの長さ(a)を枝打ちの残枝長と呼んでいます。

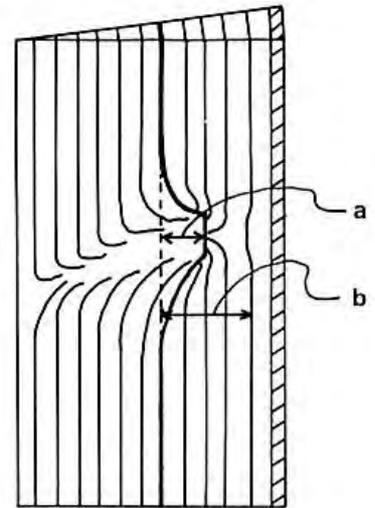
できるだけ残枝長が短くなる(幹にぴったりと接する)ように枝打ちを実施することが望ましいのですが実際は幹の樹皮の厚さなどのためにカラマツでは1 cm前後の残枝ができます。

bは点線から巻き込みが完了した時の年輪までの長さをあらわしています。私達がしらべたbの値は枝の太さ(直径)やナタ、ノコ、ハサミなどの枝打ち用具にはほとんど関係なく1.5~2.0(cm)でした。すなわち枝打ちののち幹の直径が3.0~4.0 cm生長した時点で巻き込みが完了し、材の表面は無節となります。したがって巻き込みに要する年数は幹の肥大生長がおう盛な若い林分ほど短期間ですみます。私達がしらべた

林分(11年生で枝打ちを実施)ではもっとも巻き込みが早かったもので2~3年でした。もっと高齢なあるいは地位が低く生長が衰えた林分では10年以上を必要とするものと考えられます。これまで述べてきたことを基本にして目的とする伐期なり用途(丸太をとるのか角材をとるのかなど)に応じて、その時点の幹の肥大生長から逆算すると適切な枝打ちの林齢を決定することができます。

一般的な取り扱いとしては閉鎖が完了した直後の生長のおう盛な時点でのつ切・除伐などの保育作業と平行して1回目の枝打ちを行なうことが林分の保護・管理の面からみても望ましいと考えられます。なお枝打ちを実施するにあたって注意しなければならないことは枝打ちにともなう樹冠下への陽光量の増加によって休眠芽の長枝化(一般的には不定枝と呼んでいます)が促進されることです。この長枝化を防止するために、あまりに強度の枝打ちは避け、とくに林縁木に対しての枝打ちは控えた方がよいでしょう。

(造林科 浅井達弘)



枝打ち木の縦断面